



名古屋大学高等教育研究センター・ニュースレター

CONTENTS

Keynote

高等教育研究とはなんだろう

高等教育研究センター長 黒田 光太郎

2

Interview 「名大の未来を考える」

第8回：農学部・生命農学研究科の現状と将来構想

生命農学研究科長 山本 進一

4

University Teaching

「文」「理」の問いの場《Your body is a battleground》
 - 全学教養科目「メディアアート」を開講して

情報科学研究科 助教授 茂登山 清文

9

Guest Essay

教師のカリキュラムデザイン能力に関して

北京大学 教授 高 利明

11

Activities

センターの活動

13

Seminars

平成15年度 高等教育研究センター主催セミナー

14

Staff

高等教育研究センター スタッフ

15

Calendar

高等教育研究センターの一年（平成15年度）

16

高等教育研究とはなんだろう

黒田 光太郎（高等教育研究センター長）



2003年1月から高等教育研究センター長を併任して、早くも1年が経ってしまった。現在センターの専任教員は7名だが、この1年間にセンター協議会で4件の人事案件を諮らせていただいたように、小さなセンターにもかかわらず、異動が多い。それは、センターがさまざまなミッションを負った活動をしていることに関連している。当初にはこんなにもセンター関連の仕事が多いとは予想していなかった。山田弘明前センター長と引継ぎの打ち合わせをした際に、センターには多くの仕事があることをご教示いただきながらも、センターの仕事は自分の仕事のうちの2割くらいではないだろうかとおおよそ考えていた。でも、違った。今では半分以上の時間をセンターで過ごしている。

高等教育研究センターが設立されて、今年度で6年目になる。4代目のセンター長として、初めて理系学部から選出され、就任に際しては大きな戸惑いがあった。センターとは「成長するティップス先生」の開発の頃から付き合いが始まり、「ゴーイングシラバス」の開発の際にはモニターを体験し、その後は利用者でもあったのだが、高等教育の研究をするということがよく理解できないで

いた。大学教育のあり方を研究する学内共同教育研究施設であるといわれると少し分かったような気になったが、センター長になってすぐの頃、センターの名称を記述する際に、高等教育センターと間違えてしまったくらい、センターに対する認識は低かったとも言える。

センターは決して教育の実践組織ではない。だったら何なのか。1990年代になり、大学設置基準の大綱化が実施され、大学の仕組みは大きく変わった。教養部が廃止され、4年一貫教育が実施されるようになり、多くの大学で全学教養教育は委員会のもとで運営されるようになった。その委員会方式が必ずしもうまく機能しなかったので、多くの大学で「大学教育センター」が全学教養教育の実施組織として設立されている。名古屋大学では、センターのほかに、教養教育院が全学教育の立案・実施をつかさどるヘッドクォーターとして設立されている。センターの教員は教養教育院のいくつかの委員会に加わり、カリキュラム設計や授業評価やファカルティ・ディベロップメントなどに貢献している。評価情報分析室の仕事もしており、中期目標・中期計画の設定にも尽力した。今後はそれらの評価にも関わっていくであろう。このようにミッションを負った仕事をしながら、先に述べた授業支援ツールを開発し、教育実践にも協力している。しかし、それだけで高等教育研究をちゃんとやっているといえるのだろうか。

センター長になってから学内外で多くの方と会う機会があり、あらためて「大学とはなにか」を考えるようになった。「大学とはなにか」を考えることは、高等教育研究における最初の動機であろう。それは高等教育機関に所属する全ての人に関わるべきことであり、決して教育学の一分野にとどまるものではないだろう。単純な言い方かも知れないが、高等教育研究とは高等教育について真剣に

考えることではないかと思う。11月にセンターにお招きした大学史・科学史の研究者である中山茂さんが、「独立法人化は大学改革のラストチャンス」という講演の中で、「15分間大学改革研究」というウェブサイトを紹介された。福岡教育大学の田中浩朗さんが開設されているもので、大学改革に関わる情報とそれに対するコメントが手短に掲げられている。このサイトから教えられることは多い。大学が大きな転換期をむかえている中で、進行中のことを捉え、それに対する意見を表明していくことは、簡単なようで難しい。それを日常的にやっていくために、15分間だけでも時間を割こうということなのであろう。こうした活動こそ高等教育の研究といえないだろうか。

2003年10月10日掲載の『MTによる授業ホームページの作成』には、次のように掲載されている (http://voice.kir.jp/kaikaku/archives/cat_73.html)。シラバスとは何かを考え、それにもとづいた実践が行なわれている。

私はかつてシラバスのオンライン化に関連して次のような提案を作成したことがある。

もし可能なら、シラバスシステムに、下記のような授業で活用できる機能を追加する。

- ・ 教員が各回の授業の記録を入力し表示できるようなスペース。シラバスの授業計画（スケジュール）と連動するとなお良い。
- ・ 教員が受講生に対する連絡事項を書くことのできる電子掲示板。
- ・ 受講生が教員に質問やレポートを送ることのできるフォーム。
- ・ 教員と受講生、あるいは受講生同士で質疑応答や討論をすることのできる電子会議室。」

モデルは名古屋大学のゴーイングシラバスであったが、このようなシステムは最近はやりのblog（weblog）ツールで実現できるのではないかと考えて調べたところ、すでにそうした例（情報通信文化論、ネットワークコミュニティ）があることを発見した。そこで私も今学期の次の授業に関してMovableType（MT）という有名なblogツールを使って授業ホームページを作ってみた。「科学と人間」（本学教養科目）「人間とエコシステム」（北

九州市立大学文学部専門教育科目、非常勤）。

国立大学の法人化が目前に迫っているが、この改革過程で大学あるいは高等教育の本来あるべき姿についての議論は残念ながらほとんど交わされなかった。社会の中で大学あるいは高等教育はどのような役割を果たすべきなのか、それにふさわしい大学の制度とは本来どのようなものなのか、施策レベルの対応がなされる以前にそれを支えるものとして本来なされるべきこうした根源的な反省が、現在進められている大学法人化には欠けている。大学の理念ともいべきこうした考察がないままに、場当たり的と映らざるをえない政策が進められている。こうした状況のなかでは、たとえ大学改革が必要であるとしても、大学が社会にとっても本当に望ましいものになるとは考えにくい。

大学改革を進めていくためには、まず現実の状況に対する分析を進め、それをもとに現状認識を深めながら改革の方向性が探られるべきであろう。しかし、それを可能とするデータも研究も十分に備わっているとはいいいがたい。高等教育研究センターが、現実の問題に対して、理念的な考察をも踏まえた上で、総合的な大学・高等教育・研究の本来あるべき姿について、具体的な提言を行なえることを願っている。だが、それを実行するには、センターの日常はあまりにも忙しすぎる。これを改善することを始めないといけなない。

シリーズ：「名大の未来を考える」

第8回：農学部・生命農学研究科の現状と将来構想

生命農学研究科長 山本 進一 教授

今回は、学部・研究科の改組を行った農学部・生命農学研究科です。その現状と将来への構想を、山本進一生命農学研究科長にうかがいました。インタビュアーは池田輝政教授（高等教育研究センター）です。

と き：平成15年6月30日(月)
午後2時30分～午後3時30分

ところ：生命農学研究科長室



異分野との交流

池田センター教授（以下：池田）：まず先生のご専門である生命農学との出会いをお話していただき、その中から生命農学の組織としてのこれまでと現状と未来を語っていただきたいと思います。

山本生命農学研究科長（以下：山本）：私は2003年10月で岡山大学から名古屋大学に赴任して8年目になります。専門は森林生態学です。それは自然林がどのようなメカニズムで維持されているのか、つまり森林の生態系の維持機構を研究しています。これは池田先生に差し上げようと思ったのですが、ある人が私の研究に大変興味を持って、絵本にしてくれたものです。これは業績としてはオープンにしていません。『ブナの森は生きている』というタイトルで、絵本作家と一緒に6年くらいかけて作りました。ここに書かれていることは私が研究で明らかにした内容で、それを6年間かけて絵にしてもらったものです。

池田：このようなところに貢献されているとはすごいですね。多才ですね。これは、研究者が社会貢献として大きな広がりを持っているというひとつのモデルになりますね。

山本：私はきわめて基礎的な研究をしていますので、サイエンスの世界では論文として発表しますが、世間に伝えるときには、絵本という形の方が子供たちには分かりやすい。ただこの方、甲斐さんという絵本作家はこういう生物ものを得意とされている方です。実際一緒に仕事すると、絵本を書く人というのは写真を撮ってきてそれを写しているものだと思っていたら、現場まで絶えず行

って写生をします。いったん座りだすと納得いくまで動かないんですね。論文というのはせいぜい1年でできますけれども、この絵本を作るのに6年かかりました。というのも絵本というのは一目でストーリーが分からなければならないので、これを作るときには苦労しました。図鑑のようになってダメだし、あまりにも抽象化してしまうと専門家が見てもおかしい。この時期にはこんな鳥はいないとか、こんなに大きく見えるはずはないとか大変でした。最後に監修をして仕上げましたが、土日が全部つぶれましたね。

森林科学の最先端

池田：すごいですね。では先生がこの分野に進もうと思ったきっかけは、どういったものだったのですか。

山本：私は大阪の中心に住んでいましたが、早くから父親を亡くし、たびたび祖父が山登りに連れて行ってくれました。そのおかげで山登りが好きになりました。趣味と職業が一致したので、すごく楽しいというか、研究イコール趣味となっています。でも今は管理職になってしまったので行けなくなってしまいました。

池田：先生の行っている基礎研究ではどのような仕事をされているのですか。

山本：世界的には1970年代の後半から森林の動態、私が今やっている森林の更新に関する研究が非常に盛んになってきました。私たちがこういう調査をするときには森林の中に固定の試験地を定め、一本一本の木にナンバーを付け、そしてその木が時間と共にどう変化していくのかを調査します。

寿命をまっとうして枯れるものもあれば、台風によって折れたりするものもある。そういう動きを追跡していく研究です。それはギャップダイナミクスとって、1980年代に新しい理論展開をおこなって非常に注目されだしました。森林の中は暗く次世代の木は育ちませんが、ギャップができると下が明るくなり次世代の木が育ちだすわけです。そして実際に具体的なデータを日本全国で集めてまとめました。これにより生物の多様性、つまりギャップができなかったら単一の樹木、種だけになってしまうのを、ギャップができると明るいとこで育つ木ができ、それによって多くの種が一緒にいられるというメカニズムを明らかにしました。今では航空写真を使うことによって過去からどう変化してきたか、個々の木が毎年どれだけ生長して枯れていくのか、森は動かないと言われていたけれどもどの程度動いているのか、とかそういうことをやっています。20年くらいやっていますから、誰も持っていないデータというのがある。そしてDNAレベルの仕事は今助教の先生と一緒にやっています。DNAを追えば親子関係が分かります。どういう親の木が枯れて、子供の木はこの親から来た樹木が育っているかを調べます。これは世界的に論文もどんどん出ているし、注目されていますね。20年分のデータを持っているので、ある人が突然やろうと思ってお金をかけてもできません。ですからこれは貴重な財産で、院生にしてもその試験地を使っています。例えば、御岳とか北八ヶ岳、それから先生もご存知の対馬、それから絵本に出てくる大山はブナ林というように、北海道から長崎までそういう試験地があります。膨大なデータですから誰も真似できない。だから院生が入ってきてもこれまでずっと継続してやってきているもののある部分をやれますから、すぐに仕事になる。だから論文の生産力は高いですね。外国の雑誌にすぐにでます。

池田：そういった木々の分類や整理はどのようにされているのですか。

山本：端的に言いますと、200m×200mの調査地を選択し、地上調査をして、ギャップのマッピングを行います。次に航空写真を使って解析します。地上の調査と航空写真が合っていないと意味がないので、どの程度の精度であるかということをも明らかにして、メソッドを開発しました。そうしますと、衛星写真が最近使われるようになってきましたが、航空写真というのは戦後間もない頃から撮られているので、今度は過去へ戻ることができるわけです。それで、昔はここに穴が空いていたけれども、今は閉じていると。そういう比較ができるようになりました。そういったギャップダイナミクスを航空写真を使って解析し、コンピュー

タで処理をします。

池田：これは先生がひとつ確立された分野ですね。
山本：そうですね。それで2000年に林学賞、学会賞をいただきました。ただ、かなり昔にこういうことに気づいた人はいたのですが、定量的に明らかにしたのは私が初めてだということです。

池田：よく息の長いそういうことをされましたね。
山本：好きだから。好きだということはものすごい推進力になります。また樹木を相手にするのは、気の長い仕事ですから時間をかけないとできません。子供達にはこういう絵本を見てもらうと、何を明らかにしてきたか、何が面白いかがわかると思いました。貢献するというほど大きなものではありませんが。

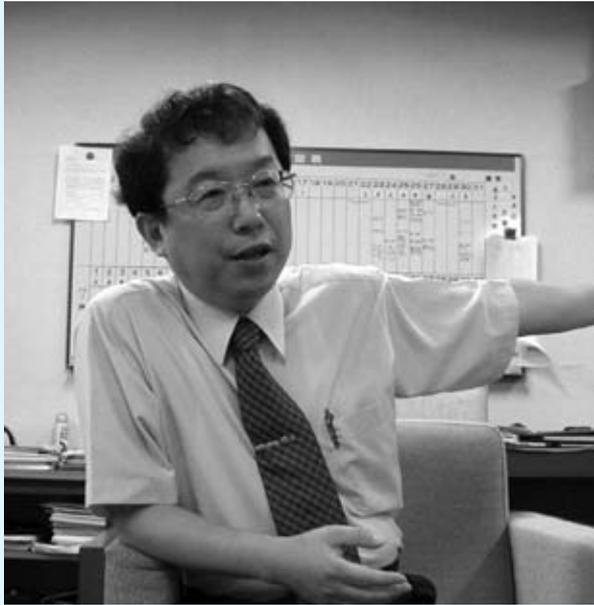
池田：すると、空から森林を観察し、またDNAのところまで掘り下げて連続性を見ようというのは、それはものすごく広がりがありますよね。DNAに着目した研究はずっと後ですよ。

山本：そうですね。だからそういう分子生物学的なテクニックが開発されてきて、これまで無理だった親子鑑定、そういうことができるようになってきました。森林の更新というのは世代交代ですから、一番気になるのは一体どの親が子供をどれだけ残したのかということです。ですからそれはDNA鑑定の方法を使わないとできません。最終的には目に見えないけれど樹木ごとに戸籍ができる。するとどれだけの木が新たに生まれてきて枯れているのかということがわかります。「動かざること山の如し」と言いますが、動かないように見えて実際は動いているわけですね。そうすることで例えば地球環境の変化、木々が突然枯れ出したといったことが起こったとき、普段からずっと調べていないと分からないですよ。そういう意味もあって森林の調査をしているわけです。

農学部・生命農学研究科の改組

池田：どうもありがとうございました。今度は組織の話をお願いします。名古屋大学の農学部・生命農学研究科のこれまでと現状ですね。これについて特徴を少しお話いただければと思います。

山本：以前は林学、林産学、畜産学、農芸化学、食品工業化学、農学の6学科あったものを、学部改組で2学科にしました。資源生物環境学科と応用生物科学科、70名と100名の170名が定員です。大学院は4専攻ですね。学部からお話しましょう。名古屋大学農学部の教育理念を学術憲章に基づいて作り直しました。2002年1月17日に制定しまして、これに基づいて学部の教育を行おうと考えました。ですからアドミッションポリシーというか、まさにこれをいろいろなところで、入学式後のガイダンスでも一番最初にこういう話を大学院生、学部



生に話します。

池田：これは見事です。見えないところで着々と組織を作っておられますね。

山本：皆さんのひとつの指針というか、理念というのはきわめて重要なものであると思います。ですから名大の学術憲章に基づいていただい時間をかけて作り上げました。

池田：作った後、プロセスも含めて、何か効果はありましたか。

山本：ええ。やっぱり時間をかけて一体自分たちの学部は何を目指しているのか、どういう特徴があるのかといったようなことを真剣に考えるという機会が持てたこと、それから教育の理念に基づいて学生たちにその理念をどのように伝えていくか真剣に考えたことです。高校生向けの説明会有一些ある時には、これを基本に説明していこうと思います。まだどれくらいの実効果があったかということとは分かりませんが、いろいろな評価に直面しても、私たちはこういう基本方針、基本理念に基づいてやっているんだということは明確にすることができます。われわれの憲法であるということで、それに基づいてアカデミックプランあるいは今度の中期目標、中期計画もこれに基づいて策定していきます。これはきわめて重要なことだと思いますね。

池田：学部は学科が2学科という、これまでと比べ大幅に少ない学科で編成されていますね。

山本：そうなんです。2学科制を採っています。資源生物環境学科と応用生物科学学科です。横断型という形で改組をしましたが、再改組ということを考えています。2学科というのはいくらにも大学科制にしすぎたので、中学科くらいがいいのではないかと今考えています。

池田：大学科の一番の問題というのはどういった

ことでしょうか。

山本：学科をあまりにも大きく括りすぎてしまい、受験生に見えにくくなったということでしょう。一番極端なのは、一学部一学科にしてしまうことですが、そうすると入ってくる時に、自分の進路を考える機会がなくなってしまいます。真剣にどの学科を選ぶかということも必要だと思いません。横断型といっても専門性も考慮しなければならないわけですから、もう少し学科を増やして、再改組で括りを適度なサイズにする方が良いと思っています。

池田：そうですか。コアは3つか4つくらいないといけないわけですね。

山本：2つではちょっと少ないですね。大枠として3つか4つくらい必要ではないかと思えます。学部はそうですね。やはり学部完結型というのも重要ですし、たとえ大学院大学であっても学部で就職したいという学生は3割程いますので、学部完結型でありながら大学院へ連続するという両方の形をとった学部体制が必要だと思えます。そのためにはもう少し大学科を中学科にすることが求められます。それは時代の流れに逆行しているのではないかという反対もありました。だから特に大学の場合よく感じるのは、しまった、間違っただと思ってもなかなか後へ引き返せないことがあります。しかしこれは間違っている、良くないのではないかというときは学生に迷惑にならない程度に大胆に変えることは重要ではないかと思っていて、うちの学部でもその辺を考えて再改組に取り組んでいます。大学院は4専攻ですけれども、4つ目の専攻である生物情報制御専攻を産官学連携、文理融合型にシフトさせた専攻に変えていこうということで生命技術科学専攻として、今概算要求案を出しています。農学というのはやはり応用科学ですから、理念としては3つの専攻をベーシックでより基礎的なことをやるものとして捉え、1つの専攻は社会とのインターフェイスを考えたより応用的なことをやるという形にはっきりと分けたいと考えています。そして3つの専攻から出てきた基礎的なサイエンスが4つ目の専攻で応用される。そして応用された中で出てきたものをまた基礎的な専攻へフィードバックして基礎研究という形を作っていきたい。それで4つ目の専攻を生命技術科学専攻として改組していくということです。

池田：なるほどよく考えられていますね。これは山本先生がリーダーシップを発揮されたわけですね。

山本：いいえ、生命農学は若い先生方が元気なので、こういうものを一生懸命考えていただくワーキンググループの先生が将来計画を見越してこの基本理念ということで時間をかけて検討していた

だきました。大学というのはやはり基礎研究と優秀な人材の養成ですから、産官学連携がなにも全てではありません。もちろん私たちはやはり農学部ですから、出口、応用というのはきわめて重要なことなので、基礎研究と応用研究というかそのバランスですよね。それがこういうひとつの理想的な形なのではないかと。これをやることによって、基礎研究の方もインスパイアされるし、またそちらから出てきたことにうまくキャッチボール式でいければいいなと考えております。

池田：こういうコンセプトというのは他の6大学は持っているのですか。

山本：東北大学はそういうことを考えておられると思います。

池田：そうすると名古屋が一步進んでいるというわけですね。

山本：そうですね。2年前から申し上げていたのですが、これは全国で一番先駆けて私たちがやるのだということを言い続けてきました。今でもこんなにはっきり打ち出しているのはうちだけです。また農学部・生命農学研究科は、農場と演習林と山地畜産実験実習施設の3つを有しています。これは農学部の特徴です。一応設置基準では農学部にはこういうものを置かなくてはならないとなっています。今度この3つを統合しまして、「フィールド教育研究支援センター」という形で概算要求を出しています。それは出来るだけの人的資源を効率的に使うことを目的としたもので、3つを統合して生命農学全体で管理運営に関係しようということです。

池田：3つを統合しようというコンセプトはどこから出てきたのですか。

山本：それぞれが別個の組織で孤立した形ではなくて、統合することによって人員を生命農学本体の方へ引き上げると同時に生命農学全体でここを管理運営していこうという発想ですね。ところが他大学の場合は逆にフィールドセンターとしてそこに専任の教官を置いているんですよ。それとは逆にわれわれは専任じゃなくて運営委員会組織で、併任みたいな形でいきますけど、そこにおられる先生方は本体へ入っていただくという形でやろうということです。生命農学研究科自体が責任を持って管理運営に参画するということですね。というのも我々の組織の弱点、欠点というのは、人的資源が少ないからです。134名ですから、それに対し東京大学が300名以上いますし、三重大学の生物資源学部より少ないんですよ。

池田：そうですか。みな気づいていないでしょうね。

山本：あまりそういうことは、名古屋大学自体がね、旧7帝大の中で一番少ないですから。だから

われわれのところも教官1人頭というのになおすと、圧倒的に業績などは高いです。よくやっていたいているなあと思いますね。

池田：まさに名古屋大学の特徴がここに出ていますね。

山本：ある意味でね。私は外から来ましたが、名古屋大学農学部はすごいな、やっぱりトップだなと思っていて、実際に来てみてトップだと思いますし、その誇りだけは教授会でも言っています。よくやっていますね。周りの評価もそうですよ。人数になおすとすごいと。また人事が全面公開公募でやっています、それが名古屋大学のうちの特徴となっていますね。

池田：全面公開公募というのはどういう風にして実現されたのですか。

山本：これは長い歴史があるのでしょうかね。とにかくほとんど特殊な例外を除いて全て公募でやっており、公募の内容に関しては部局内では全部オープンで、どなたでも傍聴できるというやり方ですね。ですから他の方々はびっくりされますね。

池田：ただ内部に育っている方々も当然いますよね。その方々も競合して応募されるわけですか。

山本：そうです。だから助教授の先生が必ずしも教授にはならない。そういう比率が32%くらいあります。三分の一くらいは名古屋とは全然関係なく、外から来ますね。私もそうですから。そのため他大学出身比率はものすごく高い。全面公開公募制でそれが維持されているということです。そのことは大学院生もむしろ外に出て行かなくてはならないというモチベーションを結果的に誘発しているのではと思います。基本的にはやっぱり他大学の出身者というのが三分の一くらいいることにより、高い研究活性が保たれていると思います。



池田：そういうバランスがないと、お互いなれ合いになってしまうこともありますね。選考基準に関するノウハウというものはありますか。あまり曖昧だと、深読みする人も出てきますし。

山本：予想されていた助教授が上がらなかったといった、つまりある程度この人だろうなと思っていてもそれよりも業績のすごい人が来たらその人に決まるとか。まさにそういうことがおきています。だからそれは皆さん認識しています。

池田：なるほど。実績の積み重ねですね。

山本：そうですね。ですから業績の評価というのはすごく厳しいし、レベルが高いというのは名古屋大学の農学部が一番大きな特徴です。もう一つは、ドクターのレベルが高いんですよ。ドクターの学位の場合は、国際誌に3本以上を有すると。ですから基本的に2本くらいパブリッシュされないとドクターの申請ができないということがあります。そのため名古屋大学のドクターの質が高いという評判はありますね。

池田：それは指導も大変ですね。

山本：指導は大変です。それでも後期課程の標準修業年限3年のうちで学位を取るのが約70%ですから他部局からするとそれは低いのではと言われますけれども、3本の論文を有することというハードルを掲げているので、結構高い率だと思います。平均3、4年くらいで学位を取っていますね。

池田：なるほど。スタンダードが高いんですね。

生命農学の将来

池田：最後に、生命農学の将来のビジョンをお聞かせ下さい。

山本：それは、中部地方の基幹的総合大学、総長が名古屋大学の目指しているところはまさにそれで、中部だけじゃなくて、うぬぼれたことを言うわけではないですが、実力的には私たちは日本一じゃないかと、フロントランナーの名の下にね。「世界屈指の知的資産の形成、蓄積と継承に貢献する」とうたっているわけですから、世界屈指を目指すということです。

池田：なるほど。これまでの実績からその言葉が言えるわけですね。

山本：もちろん、交流という観点では、とりわけアジアということを重視しております。「生命農学に関する研究の世界的拠点を目指す」COEということで掲げていますから、そのとおりにまずCOEに通りました。私は将来計画というのは、これを着々と実行に移すことだと考えています。

池田：食料問題をはじめ、世界に必要な課題解決されるテーマがたくさんありますよね。それに対する貢献というのはどうでしょうか。

山本：「食と環境、健康の質的向上ならびに生物

関連産業の発展に貢献する」こと。つまり食、環境、健康、この3つはわれわれの基本的な課題だと思っています。

池田：これは大事ですね。食と環境と健康はやっぱり農学の大事な貢献になりますね。

山本：そう思っています。ですからそれぞれの立場で食、環境、健康、それぞれの分野の方々がそれぞれに貢献していただいて、世界的なレベルを目指していただく。それによって全体のレベルアップを図っていくということですよ。

池田：こういう話を聞いて、ここで学びたいという人がどんどん増えると楽しいですよ。

山本：ええ。最近しかも女性が増えてきて、女子学生が半分くらいいますからね。これはすごいことです。以前は林学なんて女性はゼロだったのが、今は女性が多いんですよ。今は女性がだいたい半数、場合によっては私の研究室のように女性の方が多いということが起こってきますよね。今ではかえって男子よりも女性の方が元気ですね。勉強もするし山へトラックを運転して行きます。男子の方は大丈夫かなと逆に心配しています。だから女子の進学率がどんどん上がって女性を惹きつけるような魅力のあるところだったら、将来のことはそんなに心配する必要はないかもしれませんね。

池田：それは活性化のためのバロメーターかもしれないですね。

山本：そうすると多分、教官の女性比率もタイムラグで少しずつ上がっていくのではないのでしょうか。今まで一部の女性しか教官になっていないかもしれませんが、これからは同等に増えるんじゃないですか。われわれが見ている限り、女性の方がすごいです。特に就職先でも林学というのは林野庁とかそういうところですから、森林官といって、山の現地へ出ますから男の作業員を使ってやらなくちゃいけないという仕事だったので。それから山の神と言いまして、山は女性ですから女の人が入ると山が荒れるとかいう迷信とかね、けれども急激にそういうことを考えない世代とか増えてきたので。本当に最近ですよ。演習林に女性用の風呂とか増設しなくてはいけないとか。それまではいなかったわけですから。

池田：様変わりしてますね。

山本：そうですね。そういう意味ではいろんなことでバランスが取れてるし、皆先生方よくやっています。やっぱり研究に裏打ちされた講義でないという迫力がありませんし、最先端で研究をやっているとその人の講義というのはやっぱり魅力があるというか。そういう意味では大学院大学の教育でしょうね。

池田：いろいろ短い時間でしたけれども学ぶものが多かったです。今日はありがとうございました。

「文」「理」の問いの場《Your body is a battleground》 - 全学教養科目「メディアアート」を開講して

茂登山 清文（情報科学研究科助教授）

「メディアアート」という、二年生を対象にした全学教養科目を、4月からの半期間開講した。

ここでは、開講するにいたった経緯、実際の授業の進め方、受講生の感想と授業評価アンケートの結果、そしてそれを総合大学で開講する意味、の順で述べよう。

今年度から教養教育のカリキュラムが大きく改訂された。そのなかで、全学教養科目として、「現代芸術論」「人間精神と芸術」「表象芸術論」「音楽芸術論」の4科目、8コマが開講されることになった。芸術にかかわる課程をもたない総合大学では、画期的なことで、多少ひいき目かもしれないが、本学の教養教育のアイデンティティともなると期待される。

それと並行して、私自身への教養科目開講の打診があり、同じ研究科の秋庭史典助教授に相談、二人で「メディアアート」を開講しようということになった。メディアアートとは、ごく簡単に言うなら、「コンピュータや映像、インターネットなどの新しいメディアを用いたアート、あるいはそれらのメディアとの関係をテーマにしたアート」のことである。

したがってそれは、諸芸術に比べ、より学際的、科学的、社会的である。受講生にとっても、アートに関する基本的な知識がなくとも、比較的理解しやすいものと考えたのが、開講の理由である。サブタイトルには、現在のコラボブームを意識して「芸術と情報のcol-lab」とつけた。また、昨年までの4年間、基礎セミナー（コンテンポラリーアート）を担当してきた経験から、ゲストを可能な限り多く呼びたい、との希望も添えた。アーティストたちの言葉や作品にじかに触れてもらうことが、授業の理解にとってたいへん重要だと認識から

である。

シラバスの冒頭には、このように記した。

「授業は、茂登山と秋庭による講義、アーティストをゲストにむかえての作品などの紹介、コンピュータを使ったネットワークアートの体験（予定）の三つの部分からなります。講義は、前半は映像（茂登山）、後半は音（秋庭）を大きなテーマに、毎回トピックを決め、作品を紹介しながら進めます」

実際の授業も、ほぼその通りに行なった。

講義形式の部分では、写真やビデオなどの視覚資料を毎回、スクリーンに映し、できる限り受講者にとって体感的で印象に残るものとなることをめざした。

4名のゲストのうち、大垣の岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー、IAMAS出身のアーティストは、特別に開発した入力装置を用いたインタラクティブな作品を教室に設置、受講者の全員が順にそれを体験しながら講義を受けた。また名古屋芸術大学でアシスタントをしているアーティストは、文系総合館の一階の中庭をつかって、音や映像の作品に身体がからむという、5人のアーティストたちによるパフォーマンス《Center Live》をプロデュースした。

ネットワークアートの体験については、サブラボの使用が他の講義と重なった都合上、二回おこなったのみだった。しかしプラグインがアートの要求をみたしておらず、作品を体験できないケースも多かったこともあって、時間が足りなかったとの実感はなかった。

受講者には、ゲストの講義を聴くごとに、簡単なレポートを提出するよう求めた。先ほどのパフォーマンスをはじめ、これまで目にするのなかったアートの多様な表現に、「おどろいた」「感動

した」「知らない世界にふれることができた」といったような感想が多く出された。予想通りの反応とはいえ、あらためて手応えを感じる一方で、芸術を封印してきた名大生たちの過去を知ることにもなった。

授業評価アンケートの結果をみると、全学教養科目の平均と比べ、おおむね高い評価結果がでていた。「満足しましたか」に対して、39.1%が「たいへん満足した」、50.7%が「満足した」と答えており、私自身もこの結果に「たいへん満足」している。19の問のうち、全学教養科目の平均を下回ったのは三問だったが、そのうちの一つは、「成績評価の方法・基準についてわかりやすく説明されましたか」というものだった。ゲストへのレポートをだれがどのように評価するか、それ以外のレポートとの比重はどうするかなど、一年目で試行錯誤している状態のためか、正確に伝える機会を失っていたと反省している。

真・善・美のころより、美は、独立した一つの原理、価値であることにまちがいはないだろう。

それは近代にいたり、極限まで強化されることになるのだが、現代の芸術は、むしろそうした自立的な価値を前提としたところでは成り立っていない。そのことは、今回取りあげているメディアアートについて考えてみればおのずと明らかになる。

芸術であれ、メディアを扱うということは、そこで使われている科学技術と、それが使われているメディア社会とに向き合うことを意味する。メディアアートはそれらの両方から侵犯を受け、その限りでは、問いの場、議論の戦場となるのである。そこにこそ「メディアアート」の授業を開講する大きな意味があるといえる。

ファクトリーと名づけたアトリエで共同制作したポップアーティスト、アンディ・ウォーホルは、「僕がこんな風に描くのは、機械になりたいからなんだ」と言う。この驚くべき、そして矛盾に満ちた言説は、侵犯に身をゆだねながらも、なおかつアートがアートとしての存在している証とも受け取れる。戦場のなかで、アートに出会うこともまた、受講生たちに期待しているのだ。



ゲストアーティストによるパフォーマンス《Center Live》

教師のカリキュラムデザイン能力に関して

高 利明（北京大学教授）

最近、高等教育におけるカリキュラム改革の要求が世界的に高まってきています。高等教育機関の内部をみても、教職員及び学生もカリキュラム改革の重要性と緊迫性を認識してきています。したがって、高等教育機関の教職員が自らのカリキュラムをデザインする能力をもつことがますます重要になってきています。

ではカリキュラムデザインの能力とはどのような内容をいうのでしょうか。この問題に直接答えることは難しいのですが、少なくとも、その能力には、将来の社会的需要に起因する人材育成目標観の問題が関連しているでしょう。それから、人材育成のための学習目標とその効果をどう評価するかという問題、あるいはどのような学習理論を背景にカリキュラムを設計するかという問題と密接に関連していると思います。以下では、こうした問題を考える上で参考になる文献を簡単に紹介してみましょう。

人材の育成目標観についていえば、日本の学者である波多野誼余夫氏（波多野・稲垣（1986）、Two courses of expertise. in *Child Development and Education in Japan*, H. Stevenson, H. Azuma, and K. Hakuta, eds: W. H. Freeman）が提唱した「適応的熟達（Adaptive Expertise）」という概念は非常に興味深いものです。そこでは、熟達者が2つの類型に分けられます。一つの類型は「手際の良い熟達者（routine expert）」と呼ばれ、作業上同じ手続きを何回も繰り返すことにより、作業遂行の早さと正確さを身につけた熟達者です。二つ目の類型は「適応的熟達者（adaptive expert）」といわれるもので、手続きの遂行を通じて概念的知識を構成し、課題状況の変化が生じて柔軟に対応し、適切な解を導く熟達者です。両タイプとも優れた課題解決能力を有しますが、「適応的熟達者」の方が課題解決に際し柔軟性を有しているという違いがあります。このことは、成功するプロフェッショナルとしては、「適応的熟達」のタイプに育

てるほうがよいことを意味しています。これまでに議論されてきた「スペシャリスト」対「ジェネラリスト」の範疇ではない、21世紀の「プロフェッショナル」人材観として魅力があると思います。

教授・学習目標の設定と評価の問題はカリキュラムデザインを規定する影響力をもっています。にもかかわらず、現在の大学では、教授・学習目標を評価する際に、記憶力、記述力、既存モデルの単純な応用力という側面への検証に偏っており、内容に対する深い理解力、応用範囲を広める力、創造性を高める能力への配慮が欠けていると思います。この問題の解決には、人材育成のニーズを明確にし、学習者と学習目標の分析を通して目標と評価基準を設定し、それに沿って課題と教材の開発を行うというケアリー等（Dick, Carey and Carey(2001)*The Systematic Design of Instruction*: Longman）が提示した（図1）すなわちインストラクショナル・デザインの体系的思考コンセプトがとても役立つと思います。

近年では、学習理論の研究に関しては国際的には画期的な進歩がみられます。それは教師のカリキュラムデザイン能力に理論的な裏付けを提供するようになってきています。John D. Bransford等（2000）の著作（J. D. Bransford, A. L. Brown, and R. R. Cocking, eds. *How people learn: brain, mind, experience, and school*: National Academy Press.（『授業を変える』北大路書房2002年））はその代表のひとつであり、「適応的熟達」についても詳細に述べてあるので、一読の価値があるでしょう。とくに「熟達者の知識」に関する6原則からのアプローチはとても興味深いものがあります。この6原則が学習や教授法にどのような示唆を与えているのかがよく理解できます。たとえば、原則1「熟達者は、初心者が気づかないような情報の特徴や有意なパターンに気づく」にそえば、情報の有意なパターンを認識する能力を高める学習

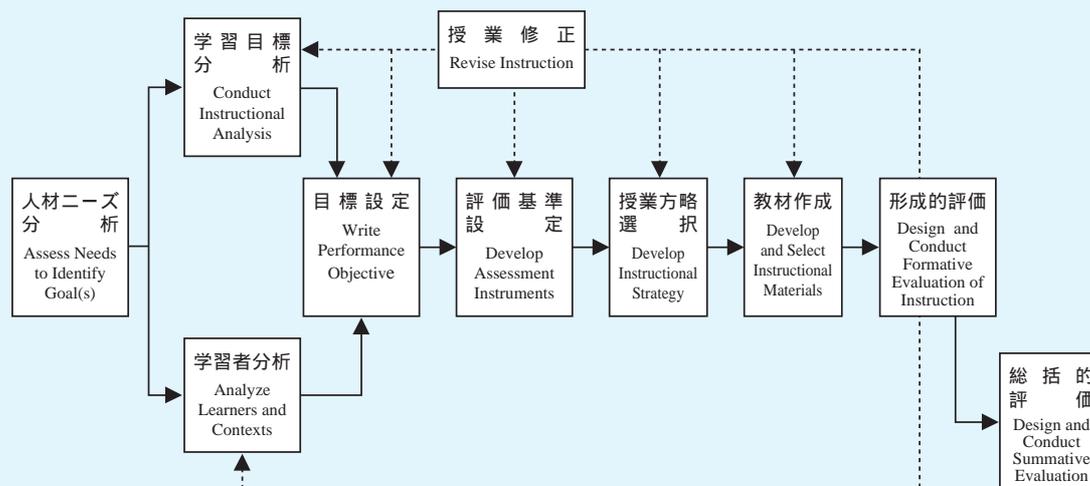


図 1

経験カリキュラムを与えることが重要なポイントになることが理解できます。また原則 2「熟達者は、課題内容に関する多量の知識を獲得しており、それらの知識は課題に関する深い理解を反映する様式で体制化されている」に従えば、事実の表層的理解では学習や仕事の能力向上に役立たないと

いうことから、初心者が知識を体制化できるようなカリキュラムの必要性が示唆されます。

このように、最近の学習理論、とくに認知心理学の成果をふまえた Bransford 等の著作は、高等教育機関がカリキュラムをデザインする際に重要な視点と示唆を与えるものとなっています。

熟達者の知識に関する 6 つの原則

- 原則 1 . 熟達者は、初心者が気づかないような情報の特徴や有意なパターンに気づく。
- 原則 2 . 熟達者は、課題内容に関する多量の知識を獲得しており、それらの知識は課題に関する深い理解を反映する様式で体制化されている。
- 原則 3 . 熟達者の知識は、個々ばらばらの事実や命題に還元できるようなものではなく、ある特定の文脈の中で活用されるものである。すなわち、熟達者の知識は、ある特定の状況に「条件付けられた」ものである。
- 原則 4 . 熟達者は、ほとんど注意を向けることなく、知識の重要な側面をスムーズに検索することができる。
- 原則 5 . 熟達者は、自分が専門とする分野について深く理解しているが、それを他者にうまく教えることができるとは限らない。
- 原則 6 . 熟達者が新奇な状況に取り組む際の柔軟性には、様々なレベルがある。

(翻訳・編集：小湊 卓夫・沈 晶晶)

センターの活動

「ゴーイングシラバス」がバージョンアップ

研究活動の一環として運用している「ゴーイングシラバス」が、バージョンアップされました。これまでにご使用いただいた先生方の意見を積みながら、当センターの考える授業改善のアイデアを形で示すことにこだわって改訂しました。

例えば、シラバスの授業計画では授業時間内の学習活動と時間外の学習活動を分けて入力する形式になりました。授業デザインにおいて学生の学習支援を意識できるレイアウトになっています。また、みんなの部屋（電子掲示板）にファイルを添付する機能が追加され、時間外に課題の提出を行い、提出された課題を受講生の間で講評しあう場として使われています。

今回の改訂で見た目のデザインも落ち着いたものになりました。このデザインは本学大学院人間情報学研究科の修了生遠藤潤一さんに作成していただいたものです。

ゴーイングシラバスはどなたでもご使用いただけますので、ご関心がありましたらセンタースタッフまでご連絡いただければ幸いです。（ゴーイングシラバス：<http://gs.cshe.nagoya-u.ac.jp/>）

外部評価報告書が完成

このたび『外部評価報告書』を刊行しました。これは、平成15年3月6日に開催された外部評価委員会（委員長：茂里一紘広島大学高等教育研究開発センター長、所属は当時）の記録とその後の当センターの対応についてまとめたものです。

外部評価委員会では、委員による意見に対してセンター側で検討して返答してほしいとの要請を受け、当日の記録と共に当センターで検討した各委員へのコメントをお送りして再度の意見をいただきました。そうした意見をさらにセンター側で検討し、当センターの中期目標・中期計画に反映させるという作業を行いました。外部評価報告書ではこれら一連のプロセスが記録されています。

こうした作業にはかなりの時間がかかりましたが、形式的ではない真剣勝負としての外部評価報告書がまとめることができたのではないかと自負しております。

MOT プロジェクトに参加

今年度、学校法人河合塾、東京都立大学と共同で「MOT マネジメントコア科目およびMOT 教授法・教授法改善プログラムの開発」（平成15年度補正予算、経済産業省）に参加いたしました。これは技術経営（Management of Technology：MOT）人材等の高度専門人材育成のための科目開発プロジェクトです。

当センターは河合塾からの受託研究という形で参加し、『プロフェッショナル・スクールのための授業設計ハンドブック』を制作しました。このハンドブックでは、講義、セミナー、共同プロジェクト方式、ケースメソッドなど、多様な授業形態にかかわらず有効と考えられている、インストラクショナル・デザインに基づいた授業設計の手法化を試みました。また、社会人学生の学習活動をどうやって促進したらよいかについても、いろいろな提案を行っています。

「スタディティップス」プロジェクトが進行中

当センターでは、多くの反響を呼んだティーチング・ティップスに続く研究制作物として、新入生向け「スタディ・ティップス」の制作に現在取り組んでいます。

スタディ・ティップスとは、名古屋大学の新入生が入学後の半年間で、大学で学ぶ意味を発見し、4年間の学習構想力を持てるようになるためのヒントをまとめたものです。特に米国の大学で盛んに制作されているスタディ・ティップスですが、当センターでは名大生を対象に、学習活動のティップスに絞って、高等教育の専門的な立場から有効なティップスの制作を試みています。

来年度には、学内でのフィードバックを取りながらさらに名古屋大学の人に大事にもらえるティップスにするべく研究を重ねていきます。

高等教育研究センター主催セミナー

平成 15 年度

第 29 回招聘セミナー (2003 年 5 月 16 日)

「受講生として見たアメリカのビジネススクールの教授法」

佐藤 智恵氏 (株式会社ポストン・コンサルティング・グループ)

第 19 回客員教授セミナー (2003 年 7 月 18 日)

「Human Performance Technology
- 目標と成果を保証するマネジメント手法 - 」

高 利明 客員教授

第 20 回客員教授セミナー (2003 年 8 月 22 日)

「高等教育ユニバーサル化時代における初年次教育の課題」

濱名 篤 客員教授

第 30 回招聘セミナー (2003 年 11 月 28 日)

「独立法人化は大学改革のラストチャンス」

中山 茂氏 (神奈川大学名誉教授)

第 21 回客員教授セミナー (2003 年 11 月 28 日)

「私学からみた国立大学法人化への期待」

潮木 守一 客員教授

第 22 回客員教授セミナー (2003 年 12 月 11 日)

「高等教育の国際化
- 成果指標と実績評価の観点から - 」

マイケル・ベイジ 客員教授

第 31 回招聘セミナー (2004 年 1 月 27 日)

「FD の Future Design - 学生による授業評価と授業公開をデザインする - 」

三浦 真琴氏 (静岡大学大学教育センター教授)

第 32 回招聘セミナー (2004 年 2 月 2 日)

「立命館大学における教育評価システムの構築 - 授業評価から教学検証へ - 」

平井 孝治氏 (立命館大学経営学部教授、大学教育開発・支援センター副センター長)

第 33 回招聘セミナー (2004 年 2 月 26 日)

「高等教育の経済学」

渡邊 聡氏 (筑波大学大学研究センター講師)

第 34 回招聘セミナー (2004 年 2 月 26 日)

「外国語教育における教授法と授業設計
- 『教授頻度の低い言語』の教育が抱える課題 - 」

田原 洋樹氏 (立命館アジア太平洋大学常勤講師)

第 35 回招聘セミナー (2004 年 2 月 27 日)

「大学カリキュラム論 - アメリカからの示唆 - 」

川島 太津夫氏 (神戸大学大学教育研究センター教授)

第 36 回招聘セミナー (2004 年 3 月 1 日)

「初年次教育における教育評価とポートフォリオ活用」

ウェンディ・トロクセル氏 (イリノイ州立大学大学評価室長)

第 37 回招聘セミナー (2004 年 3 月 1 日)

「エンロールマネジメントと学習共同体
- 学習共同体の有効性 - 」

ジョン・ペッチャウアー氏
(アパラチアン州立大学教養教育担当ディレクター)

第 38 回招聘セミナー (2004 年 3 月 12 日)

「金沢工業大学の TQM 活動
- 経営品質への取組 - 」

村井 好博氏 (金沢工業大学企画調整部長)

記念講演会 (2004 年 3 月 15 日)

「創造のセンス
- 何かが生まれる予感を持ち続ける - 」

池田 輝政氏 (名古屋大学高等教育研究センター教授)

特別セミナー (2004 年 3 月 24 日)

「会計教育におけるグローバル・スタンダードの影響」

野口 晃弘氏 (名古屋大学大学院経済学研究科助教授)

スタッフ（2004（平成16）年3月現在）



センター長
黒田 光太郎

専門領域：材料科学工学・工学教育
電 話：052-789-5694
052-789-3349（工学研究科）
メー ル：kuroda@cshe.nagoya-u.ac.jp



助 手
青山 佳代

専門領域：大学評価・西洋教育史
電 話：052-789-5814
メー ル：aoyama@cshe.nagoya-u.ac.jp



教 授
池田 輝政

専門領域：高等教育学・教育行政学
電 話：052-789-5693
メー ル：ikeda@cshe.nagoya-u.ac.jp



事務官・専門職員
井上 和美

電 話：052-789-5696
メー ル：inoue@cshe.nagoya-u.ac.jp



助 教 授
近田 政博

専門領域：比較高等教育学・初年次教育
電 話：052-789-5692
メー ル：chikada@cshe.nagoya-u.ac.jp

2003年度 外国人客員教授



客員教授
高 利明

（2003年4月～9月）

北京大学（中国）教授
専門領域：遠隔高等教育に関する研究



助 教 授
中井 俊樹

専門領域：高等教育マネジメント・大学教授法
電 話：052-789-5385
メー ル：nakai@cshe.nagoya-u.ac.jp



客員教授
マイケル・ページ

（2003年10月～2004年3月）

ミネソタ大学（米国）教授
専門領域：高等教育カリキュラムの国際化



専任講師
鳥居 朋子

専門領域：高等教育カリキュラム論・
教育経営学
電 話：052-789-5691
メー ル：torii@cshe.nagoya-u.ac.jp

2003年度 国内客員教授

客員教授
濱名 篤

関西国際大学 教授
専門領域：初年次教育



助 手
中島 英博

専門領域：教材作成法・労働経済学
電 話：052-789-5384
メー ル：nakajima@cshe.nagoya-u.ac.jp

客員教授
潮木 守一

桜美林大学 教授
専門領域：教育社会学



助 手
小湊 卓夫

専門領域：大学評価・経済学説史
電 話：052-789-5815
メー ル：kominato@cshe.nagoya-u.ac.jp

人事異動（平成15年度）

小湊卓夫（名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程）
2003年4月1日付でセンター助手

青山佳代（名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程）
2003年6月16日付でセンター助手

鳥居朋子（センター助手から昇任）
2003年5月1日付でセンター専任講師

高等教育研究センターの一年(平成15年度)

2003年

- 4月1日 小湊卓夫氏(名古屋大学大学院経済学研究科在学)がセンター助手(評価情報分析室員)に着任。高利明氏(北京大学教授)がセンター客員教授に着任(～9月30日)。センター担当事務官として井上和美氏(学務課専門職員)が着任
- 4月3日 全学教育担当教官FD(主催:教養教育院)
- 4月4日 第1回運営委員会
- 4月15日 第1回協議会
- 4月18日 第1回センター会議
- 5月1日 鳥居朋子氏(名古屋大学高等教育研究センター助手)がセンター専任講師に昇任
- 5月6日 第2回運営委員会
- 5月13日 第2回協議会
- 5月14日 第2回センター会議
- 5月16日 招聘セミナー
佐藤智恵氏(ボストン・コンサルティング・グループ)
「受講生として見たアメリカのビジネススクールの教授法」
- 5月29日 第3回センター会議
- 6月16日 青山佳代氏(名古屋大学大学院教育発達科学研究科在学)がセンター助手(評価情報分析室員)に着任。
- 6月19日 第4回センター会議
- 7月17日 第5回センター会議
- 7月18日 客員教授セミナー
高利明氏(北京大学教授)
「Human Performance Technology - 目標と成果を保証するマネジメント手法 - 」
- 8月1日 中井俊樹助教授が文部科学省長期在外研究員としてミネソタ大学に着任
- 8月20日 韓国ウーサン大学の訪問団が来訪
- 8月22日 客員教授セミナー
濱名 篤氏(関西国際大学教授)
「高等教育ユニバーサル化時代における初年次教育の課題」
- 9月3日 第6回センター会議
- 9月16日 第3回協議会
- 9月30日 第3回運営委員会
- 10月1日 マイケル・ベイジ客員教授(ミネソタ大学教授)が着任(～3月31日)
- 10月2日 全学教育担当教官FD(主催:教養教育院)
- 10月21日 第4回協議会
- 10月31日 第7回センター会議
- 11月27日 第8回センター会議
- 11月28日 招聘セミナー
中山 茂氏(神奈川大学名誉教授)
「独立法人化は大学改革のラストチャンス」
- 12月11日 客員教授セミナー
潮木守一氏(桜美林大学教授)
「私学からみた国立大学法人化への期待」
- 12月16日 客員教授セミナー
マイケル・ベイジ氏(ミネソタ大学教授)
「高等教育の国際化 - 成果指標と実績評価の観点から - 」
- 第9回センター会議

2004年

- 1月19日 第10回センター会議
- 1月27日 招聘セミナー
三浦真琴氏(静岡大学教授)
「FDのFuture Design - 学生による授業評価と授業公開をデザインする - 」
- 1月31日 『名古屋高等教育研究』第4号を発行
- 2月2日 招聘セミナー
平井孝治氏(立命館大学教授)
「立命館大学における教育評価システムの構築 - 授業評価から教学検証へ - 」
- 2月12日 第11回センター会議
- 2月26日 招聘セミナー
渡邊 聡氏(筑波大学専任講師)
「高等教育の経済学」
田原洋樹氏(立命館アジア太平洋大学常勤講師)
「外国語教育における教授法と授業設計 - 『教授頻度の低い言語』の教育が抱える課題 - 」
- 2月27日 招聘セミナー
川嶋太津夫氏(神戸大学大学教育研究センター教授)
「大学カリキュラム論 - アメリカからの示唆 - 」
- 3月1日 招聘セミナー
ウェンディ・トロクセル氏(イリノイ州立大学大学評価室長)
「初年次教育における教育評価とポートフォリオ活用」
ジョニ・ベッチャウアー氏(アラバマ州立大学教養教育担当ディレクター)
「エンロールマネジメントと学習共同体 - 学習共同体の有効性 - 」
- 3月12日 招聘セミナー
村井好博氏(金沢工業大学企画調整部長)
「金沢工業大学のTQM活動 - 経営品質への取組 - 」
- 3月15日 記念講演会
池田輝政氏(名古屋大学教授)
「創造のセンス - 何かが生まれる予感を持ち続ける - 」
- 3月16日 第2回日本WebCTユーザーカンファレンス
～17日(後援)
- 3月24日 特別セミナー
野口晃弘氏(名古屋大学助教授)
「会計教育におけるグローバル・スタンダードの影響」
- 3月31日 『高等教育研究プロファイル』第8号を発行

高等教育研究プロファイル 第8号

名古屋大学高等教育研究センター ニュースレター

2004年3月31日発行

編集委員: 黒田光太郎、池田輝政、近田政博、中井俊樹、鳥居朋子、中島英博
青山佳代、小湊卓夫(幹事)

発行 名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL 052-789-5696(事務室)

FAX 052-789-5695(同上)

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>